

新春政治座談会 政治の閉塞を撃つー田中康夫氏／渡辺喜美氏／枝野幸男氏  
「毎日新聞」2003年1月1日付

本文 ◇変わりゆく有権者、政党の未来は

有権者の意識の中で大きな地殻変動が依然、続いている。02年は、それを改めて感じさせる一年だった。さて03年。一連の地方選挙で鮮明になった有権者意識の変化は、今年、どこまで中央政界を揺さぶっていくのか。そして、変化のスピードについていけないと指摘されて久しい政党に未来はあるのか――。長野県知事選で再選された「ウルトラ無党派」、田中康夫氏（46）と、自民党で「無派閥」を貫く渡辺喜美氏（50）、民主党政調会長に就任したばかりの枝野幸男氏（38）の3人が語り合った。【司会は政治部副部長・与良正男、写真・小座野容斉】

―国会議員のお二人は、昨年長野県知事選をどう見ていましたか。

渡辺喜美氏 自民党の改革抵抗勢力と呼ばれる人たちは明らかにびびったと思いますよ。

田中康夫氏 本当にそうなの？

渡辺氏 もちろん彼らが口に出すのは、選挙戦術の失敗とかだけれど、内心は下手に改革に抵抗して「小泉（純一郎首相）降ろし」をやると、大変な目に遭うと悟ったというのが本音だったんじゃないですか。

―民主党も地元県議会では「知事不信任」のリード役でしたが。

枝野幸男氏 あのことは大変残念に思いました。「何考えているんだ」と。ただ、悩ましいのは、地方分権を強く言っている民主党が、地方議会にどこまで介入してよいのか。もう一つは国会における議院内閣制での政党と、県知事のような大統領制での政党との違い。矛盾は、我々も自民党も抱えている。

―2人の話を聞いて田中さんは、どう感じますか。

田中氏 大切なのは、いかに「届く言葉」を持った候補者か。そして当選後も市民と同じ体温で、私利私欲とは無縁のしなやかさ、いい意味での頑固さを持ち続けられるかどうか。政事家（ポリティシャン）でなく勇気と希望を与える政治家（ステーツマン）かどうか。

渡辺氏 長野県知事選は投票率はどのくらいでしたっけ。

田中氏 前回より4ポイント高い73・78%。強権的で独善的と私を批判してきた多くの新聞は「消極的に田中を選んだ」などと書いたけど、それは他の候補者と有権者に失礼です。「政官業」の利益分配トライアングルに学者、報道を加えた「政官業学報」の現状追認ペンタゴン（五角形）、その敗北です。役

人が書いた台本に、業界も政治家も乗り、官に好都合な学者、そして報道機関が追認してきた。そのなれ合いに、市民は最後通牒（つうちょう）を突きつけている。

枝野氏 国政に対しても国民の見方は同じと思う。ただ、国会の場合は、1人いい人が出てきたからといって、結果はすぐには動かない。

—それが確かに現実ではあります。

渡辺氏 知事の場合はいきなり出てきて、当選できる。わが永田町は、橋本龍太郎さんが33年かかって首相になった。小渕恵三さんは35年。「棚からボタモチ」の森喜朗さんでも31年。小泉さんは29年。

—考えてみれば長いですね。

渡辺氏 国会議員は土曜日曜なしで、白と黒のネクタイ持って（冠婚葬祭に）駆けずり回る。三十何年もやっていると、相当ガタが来る。しかし、それが永田町モデルなんです。スターを作るシステムになってない。スターが出てこようとすると、みんなが足を引っ張ってスターダスト（星くず）になってしまふ。

田中氏 うまいこと言う。届く言葉を持ってるね。

渡辺氏 これが小泉さんになって変わったか。何のことはない、橋本派を冷遇しているだけで、副大臣とか政務官はほとんど年功序列と派閥秩序なんです。これが国民に飽きられ、大胆な政策決定ができない最大の元凶であるにもかかわらず、変えられないところに一番の問題がある。

—小泉内閣の話に移りましょうか。

田中氏 連立する政党すらのみ込んだじゃう欲深な自民党は百貨店。デパ地下の食品、上階の家具売り場と多様な派閥の顔があった。でも今や書き割りのような小泉純一郎だけが売り物。

渡辺氏 しかも、小泉さんの旬は今から20年前だったんじゃないでしょうか。80年代前半は米国のレーガン大統領、英国のサッチャー首相がリーダーシップを発揮して大改造をした。あの時代の政治モデルのようなものを強烈に首相はお持ちなんだと思う。

しかし今の日本のように10年以上もデフレが続くと、「レーガン・サッチャーモデル」が機能する状況ではない。30年もかけて首相になるシステムだと、どうしても過去の成功体験とか、旬だった時代のパラダイムにとらわれすぎちゃう。

田中氏 彼が瞬間風速的に支持されるのは、その発言がテレビ的だったからです。でも「ワンフレーズ」政治は、どんなに人気のあるテレビドラマもそうであるように、3カ月、せいぜい6カ月しか持たない。彼の場合は、女性、若年、英語のできる人を重用するけれど、その先がない。

—小泉改革を具体的に見るとどうですか。

田中氏 誰も責任を取らない護送船団の後始末に、竹中平蔵というハードランディングの人を選ぶのは当然。でも、同時に福祉・教育・環境という21世紀型の、人が人をお世話をする、新たな労働集約的産業で雇用を生み出すソフトテイクオフ（離陸）のディレクターが必要。なのに、竹中氏すら守ろうとしない丸投げ宰相には、そのセンスも危機感もない。

経済の専門的知識はリーダーの必須要件ではない。大切なのは敏感に時代をとらえるきゅう覚と、的確に方向を示す判断力だと思う。

枝野氏 中身が分かってないから、こうなるんだと思う。逆に、小泉さんが中身を分かっている、「自分でこうしたい」があったら、とっくにつぶされていた。中身がないから安心して担いでいた人も多かったのではないですか。

渡辺氏 分かっていない部分は、分かっている人を補佐官につける必要がある。補佐官を上手に使っていない。小泉さんの出身派閥の森派の人に「小泉さんは政治家不信。政治家は裏切るから嫌いなんだ」と聞いたことがある。裏切らない官僚と民間人を側近につけていると。

枝野氏 そのやり方は正しくない。誰を側近として使うか、最重要の政治判断でなくてはならない。

渡辺氏 私たちは小泉さんに言われて、自民党国家戦略本部で検討し、改革案を出した。そこには官邸直属のポリシーユニット（政策集団）を作ったかどうかと書いてある。

—いろいろ画期的な提案をしましたが生かされてませんよね。

渡辺氏 残念ながら我々が権力を握れていないからです。でも、例えば、今の金融問題は産業界の過剰債務問題とセットになっている。しかし、その過剰債務問題を扱う役所はどこにもない。ワンセットで処理再生するには、首相官邸直轄でやるしかない。

竹中さんは、スーパー補佐官のようなものだけれど、竹中さんの金融プログラムと塩川正十郎財務相が持ち出した産業再生機構はまるでミスマッチ。各省庁が、バラバラに出してくるから整合性がない。相変わらず露骨な役人主導だ。

枝野氏 小泉さんは、永田町や霞が関の動かし方も従来の仕組みを分かっているから、大胆なことがやれるという期待もあった。でも、（田中）康夫さんの場合は、今の時代、何が大切かを分かっている。小泉さんの場合は、従来の常識にとらわれないということだけがあって、だから期待感を込めて人気は高いけれども、何か建設できるのかというとできない状態がずっと続いている。

—自民党の抵抗勢力が野党のように扱われ、首相との対立ばかりがクローズアップされて、民主党などの存在がかすんでしまった。それも議会制民主主義の危機じゃないですか。

渡辺氏 「小泉流タコ揚げ術」と私は呼んでいる。向かい風に向かって走っていかないと、タコは高く揚がらない。スキーのジャンプも同じ。アゲンストの風に乗ってK点越えする。だから、あえて抵抗勢力を挑発し、怒らせて、高く舞い上がるという……。

田中氏 でも、着地点は従来とさして変わらないよ。理念も哲学も持ち合わせていない彼のは、ガチンコ勝負じゃないからです。脂ギッシュな政治家と無表情な官僚というヒーロー（悪役）に助けられている。

渡辺氏 小泉流プライオリティー（優先順位）は、まず抵抗勢力を挑発することにある。それでは再生は無理です。裏に隠れているのが、政治部記者の言うところの旧田中派對旧福田派による「角福おん念史観」というやつね。道路とか郵政とか今の橋本派に連なる旧田中派の利権構造を完膚なきまでにやっつける。分かりやすく世論が沸騰する。

枝野氏 我々は実は敵が二つある状況の中で戦っているようなもんなんですよ。竹中氏をたたくと、抵抗勢力の亀井静香前政調会長の仲間だと思われる。亀井氏をたたけば竹中氏の仲間だと思われる。我々、どちらでもないんです。ってことは、2倍のエネルギーがいる。

—政治を変えるには本来政権交代が必要だと思います。ところが、ますます遠のいてしまっている気がします。

枝野氏 難しいのは、今3人で話していると、対立軸というのはだいたい一致していそうな感じがするのだけれど、そうじゃない軸を置いている人がいるわけですね。例えば憲法を変える、変えないのかが軸だとメディアも含めてやっている。私なんか今、そんなことをやっている暇はないと思うのですが。

田中氏 その意味で言えば、私は菅直人民主党代表と、小沢一郎自由党党首が今こそ「超合金ロボット」にならないといけないと思います。

枝野氏 その話は聞きたくないなあ（笑い）。

—なぜ「菅・小沢」はダメなんですか？

枝野氏 ある局面までは菅さんにやってもらうしかないなっというのが昨年終盤の民主党の結論なわけですよ。若手は、まだ力が足りなかったということだと思っただけですね。でも、僕、小沢さんが何をしたいのか、分からないんですよ。

田中氏 いや、明確だよ。彼がハードランディングを担当し、先ほど話したソフトテークオフをお宅の代表（菅氏）が担当する2年間限定の日本経済再生内閣。ゼネコンも真っ青な丸投げ宰相は、今後、さらにダッチロールし始める。他方、マスメディア君からたたかれ続けてたくましくなったお二人には、日本社会を救う最後の機会という無欲の熱意がある。それに渡辺、枝野のお二人を除けば、若い世代で魅力的な人物は見当たらないでしょ。その点、「キャラ」が立っているのは、やはり菅、小沢の両氏だよ。

そこに、亀井氏と野中広務自民党元幹事長がプラスされるくらいの救国経済浮揚内閣すら必要かもしれない。そのくらい日本は追い込まれているんだ。国民ではなく市民と常に表現する私としては救国という言葉には抵抗あるけどね。

枝野氏 でも、亀井、野中両氏みたいな人たちは本質的に（組めない）……。

田中氏 死刑廃止論者の亀井氏と護憲平和論者の野中氏だよ。現住所を民主党に置いているだけの若手よりも価値がある。そもそも中道保守なんて看板じゃ自民党と変わらない。民主党はブティックとしての商品を明確にしなくちゃ。他方で亀井氏は建設相の時、300近い公共事業の計画中止を打ち出した。ガラス張りの論議で、彼らが求める公共事業の中で、市民も認める地域密接型の個所を行えば、ある種のセーフティーネットにはなる。

◇官僚主導、中央集権...システムを壊さないと再生できない。――渡辺喜美氏

◇壊した後の姿が明確でない。苦悩しているんです。――枝野幸男氏

――で、自民党だけは変わらない。ここがポイントなんですよ。

渡辺氏 まあ、亀井さん、野中さんは置いとくとしてですね（笑い）。自民党の中はマッカーサーのDNAを持ち続ける人と、私のように、それを変えることが構造改革なんだと考える人と二つの極があるんです。マッカーサーは、日本国憲法を作っただけじゃなくて、戦時体制を温存した。「1940年体制」といわれる官僚主導、中央集権、統制型、結果の平等主義……こういうものをそっくり残した。

――日本型システムというやつですね。

渡辺氏 右肩上がりの経済成長路線をひた走る時代にはとても有効だった。しかし、ベルリンの壁崩壊をきっかけに、逆回転し始めちゃった。とんでもない債務デフレが起き始め、システムが崩壊していく。何から手をつけるかは一目瞭然（りょうぜん）です。この戦時体制のシステムを壊さないと日本は再生できない。

――それが対立軸にもなるということ？

渡辺氏 「壊そう」と考える我々と、温存しようという人たち。自民党と社会党・社民党が組む自社さ政権がそうでしたけれど、そんな権力構造を温存しようというものすごい意思が働いて、改革が中途半端に終わってきた。

――枝野さんは、その自社さ政権の一員だったわけですからね。

枝野氏 対立軸は何なのか。半分、渡辺さんと似ています。自民党がやってきたゆがんだ社会民主主義体制。これはもう時代遅れになっている。ただ問題は、それを壊す、壊さないが対立軸になるというのではなくて、壊した後に何

が起きるのか、実はそこが軸になるべきだと思う。それに代わるものが明確になっていないから、今の体制も壊し切れない。

田中氏 枝野さんが考える「その後」とは何なの？

枝野氏 基本的には、リスク分散は国家がすればいい。年金、医療、介護とか、システム作りをすればいいんであって、あとは皆さん、自由におやりなさいと。

今までの国の役割というのは、例えばサッカーで言えば、政治・行政が中田英寿選手のように社会全体を仕切ってきた。本来は市民や民間が主役のはず。政治がするのは、グラウンド整備だと思っているんですよ。官がいろいろ不自然な形で関与しているがために、結果的に依存の構造ができてゆがんでしまっている。では、何でも自由競争にしたらいいかというところはない。グラウンド整備はちゃんとしてあげないといけないと思います。

◇世間にさらされる試練は政治家にも必要なんだ。市民が最も鋭い。――田中康夫氏

田中氏 ウルトラ無党派の私としては、政党が困っていると言われたって、「何のこっちゃ」だね。期待も信頼も寄せるに値しない議員が多すぎて、恐らく市民は自業自得と思ってる。

枝野氏 でも、知事と違い議院内閣制をとっている限りは、政党がないと機能しないシステムになっている。その一方で、同じ党より、他の党の方が考え方の近い人がいるという現実もある。

渡辺氏 まず、衆院を解散すればいいってことです。本来、政党は選挙公約を作り、勝った党の公約が次の国家戦略になる。今年は2回ぐらい選挙やったらいいんじゃないか。そうすればどんどん上の方はいなくなっていくし。

田中氏 だけど今までの政党の公約はすべての人にいい顔する総花的なものでしょ。

枝野氏 僕は（法案の賛否など個々の議員を党が拘束する）党議拘束なんて本来、おかしいと思う。でも、それなしで議院内閣制を回していけるか。内閣だってバラバラになるかもしれない。逆に党議拘束がかからない、行動がどうなるか分からない政党がいくら国民に公約しても意味がないということにもなる。苦悩しているんです。

田中氏 首相公選制のようなものを導入しないと突破できないのかなって気もする。派閥争いが絶えぬ自民党は最終的には利益分配という一点で議員が集い大所帯を保ってきた。民主党は、そんな利益分配やイデオロギーと違う政党

にしたいと思うから難しい。

枝野氏 だから、悩ましいんですよ。

渡辺氏 政治の世界で人を動かす要素ってのは大きく分けると三つなんです。一つは利益誘導。一つは脅迫。もう一つは信者を作る。この三つを組み合わせた天才が田中角栄元首相なんですけども、政治の最大の仕事というのは人心収攬（しゅうらん）（人心をつかむ）なんです。この黒雲に覆われた閉塞（へいそく）感を打破していくためには政治の求心力をもう一度取り戻す必要がある。

どうすればいいか。国会議員の数を激減させればいい。衆院は300人、参院は50人ぐらいでいい。そこで政党の枠組みを超えた淘汰（とうた）が行われて、真に公益、国益に奉仕する人間が選ばれていくというシステムにより一歩近づくであろうと思う。大激動の時代に大切なことは、当たり前のことを当たり前にする。愚直さだと思います。

枝野氏 趣旨は共感します。国民が既存組織に縛られないで自己の信念に基づいて行動する議員をきちっと選ぶというシステムにすること、議員がそれにふさわしい訴え方をして行動していくこと。ただ、自分の信念と、チームとしての内閣なり与党なりとのズレをどうやって調整していくのか。そこは一工夫しなければいけない。

—今年、中央政界も変わりますか。

渡辺氏 今年は大動乱の年になると思う。米国がいつ戦争を始めるか分かりませんが、経済的には米国も欧州もデフレに向かって突き進んでいく。日本は深刻なかじ取りを迫られる。一方で中央集権体制を変える必要があり、一方でデフレを放置しておくの大恐慌に至りかねないというジレンマがある。危機のレベルと政策対応がまったく違うところに最大の不幸がある。

—当面は小泉首相にハッパをかけていく立場ですか。

渡辺氏 私は自民党内第3の勢力。第3の道をいきます。

枝野氏 こういう人まで自民党は抱えているから、いよいよ民主党は困るんですよ（苦笑）。僕は今、危機的な状況だからこそ、焦らないことだと思っている。ようやく最近になって、組織を通じた票集めではなく、直接、自分たちに何を語ってくれて、個々の有権者の声をどう受け止めてくれるのかという基準で有権者の人たちは動いているんだということに気づき始めた政治家が少しずつ出てきた。

田中氏 私は（作家デビュー以来）22年間、「おい、田中康夫だぜ」「あら、康夫ちゃんだわ」と、ずっと世間にさらされてきたわけです。言葉面とは裏腹に前者が激励で、後者が嘲笑（ちようしょう）ということもある。その微妙な人々の空気のような、私に対する評価を皮膚で感じてきた。「もう、オレはダメなのか。いや、まだ見せるものがある」と芸能人やスポーツ選手が日々移り気

なファンの厳しい視線を浴びながら成長するように、こうした「恍惚（こうこつ）と不安」の試練は政治家にも必要なんだ。

市民が最も鋭いんです。車座集会の度に感じます。無党派を相手にするのは「今週の（人気）ベストテン」どころか「毎秒のベストテン」をやっているようなしんどさです。しかも、風見鶏ではなく、自分のプリンシプル（原則、哲学）を持ち続けながら判断し、行動し、責任を取り続けるのは。でも市民の英知を信ぜずして、どうして政治なんぞを請け負えるかってことですね。

.....

.....

◇田中康夫（たなか・やすお）氏

一橋大法学部在学中の80年、「なんとなく、クリスタル」で作家デビュー。91年湾岸戦争への日本加担に反対する声明に参加。95年阪神大震災後は、神戸でボランティア活動に取り組んだ。00年10月長野県知事に。「脱ダム」宣言などを打ち出す。02年7月、県議会に不信任を可決され、辞職後再出馬。圧勝した。56年生まれ。

◇渡辺喜美（わたなべ・よしみ）氏

「ミッチー」の愛称で親しまれた父、渡辺美智雄元副総理・外相の秘書を長く務め、美智雄氏死去後、96年総選挙で衆院栃木3区から初当選。現在当選2回。自民党国家戦略本部幹事などを務める。経済政策通として知られ、著書に「反資産デフレの政治経済学」など。早大政経、中大法卒。52年生まれ。

◇枝野幸男（えだの・ゆきお）氏

弁護士。旧日本新党の候補者公募試験に合格。93年総選挙で旧埼玉5区から出馬し、初当選。日本新党離党後、さきがけを経て、旧民主党の結党に参画した。02年12月、民主党政調会長に就任。現在当選3回。一貫して組織に頼らない「市民派」をアピール。著書に「それでも政治は変えられる」など。東北大法卒。64年生まれ。

■写真説明 （左から）枝野幸男・民主党政調会長、田中康夫・長野県知事、渡辺喜美・自民党衆院議員。田中、渡辺両氏はこの日が初対面＝東京都千代田区で